



社会科部会

社会科を通した意志をもっている姿

社会的事象に問題意識をもち、自分ならではの社会的価値を見いだし、多面的・多角的に社会認識を深めていく姿

視点 1

自らの学びをつなぐ

【その姿に向かうために】

- 一人一人が社会的事象に対して興味・関心を高め、問題意識をもって考えを進めることができるように、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などの視点で、社会的事象を捉えられるような教材の選定や単元構成を行う。
- 「この立場から考えると～。」「前の単元の資料とつなげると～。」と一つの事象に対し、様々な社会的価値を見いだせるように、複数の単元で、様々な立場から見た考えや根拠を基に思考している姿を見取り、一つの事象に対して様々な考えを見いだそうとしている姿勢を価値付け、学び方への理解を深められるようにする。
- 社会的事象と自分との関わりや今の時代とのつながりに気付き、自分に近づけながら学び進めることができるよう、自分達にかかわるような資料提示や体験的な活動などを単元の中に位置付け、社会との接点について子どもが考えられるような場を設定する。
- 学習の成果を吟味したり、新たな問いを見いだしたりして、自らの学びの価値を自覚することができるようにするために、学んだことを学習問題につなげ、どの程度近づいたかを数値や文章などで振り返る場を設定する。

視点 2

他者の学びを 自らの学びに つなぐ

【その姿に向かうために】

- 自分の考えとの共通点や差異点に気付き、自分で必要な考えを選び、思考を広げたり深めたりすることができるようにするために、ICTや板書、思考ツール、ネームカードなどでそれぞれの立場や視点を明確にし、それらの価値を考える場を意図的に設定する。
- 「あなたの立場から考えると～。」「その考えの根拠は～。」と他者の考えの立場や根拠の価値を捉えようとするために、複数の単元で、他の人の考えを取り入れながら自分の考えを再構築しようとしている姿を見取り、自分一人で学びを完結しない姿勢を価値付け、学び方への理解を深められるようにする。
- 自他の考えや根拠を「価値あるもの」と捉え、社会認識の深まりにつながることを自覚し、次の追究に生かせるようにするために、他者の考えを付箋や丸シール、別の色のペンなどで自分の考えと関連付けながらまとめるなど、自他の考えを踏まえて、自らの考えを再構築していく場を設定する。

社会科部の成果と課題

【令和7年度の社会科部で目指した意志をもっている姿】

社会的事象に問題意識をもち、自分ならではの社会的価値を見だし、多面的・多角的に社会認識を深めていく姿

次年度につなげていきたいことや方向性について

視点1 自らの学びをつなぐ

追究意欲の高まりと持続に向けた計画の共有

学習内容の見通しをもち、追究意欲を高めて持続しながら学んでいく子どもの姿を生むために、子どもたちから出た予想や疑問を束ね、子どもとともに単元の学習問題を設定した。その結果、単元を通して何を追究していきたいかという目的意識をもち、学習問題を意識して学ぶ姿が見られた。しかし、学習問題だけでは、自ら資料を求め、向き合って追究する姿を生むには十分ではないと考えた。学習問題の設定に留まらず、追究の進め方を教師と子どもで共有し、各時間の学習が単元全体の中でどのような意味をもつのかを捉えられるようにしていく。そうすることで、より具体的な見通しをもつことができ、どの子どもも意欲を高め持続させながら、既習や資料に向き合って追究する姿につながると考える。

より確かな自覚に向けた到達規準の共有

自らの学びの価値を自覚できるよう、学んだことを単元の学習問題につなげ、どの程度問題の解決に近付いたかを数値や文章などで振り返る場を設定した。振り返りを通して、自分たちの学びが単元の学習問題の解決に向かって進んでいることを実感し、「解決できそうだ。」という見通しをもつ子どもの姿が見られた。一方で、その実感の拠り所となる基準や根拠が明確でなく、子どもが何を根拠に「近付いた」と判断しているのかが曖昧なまま振り返りが行われる場面もあった。そのため、振り返りの内容に差が生まれ、子どもが学習問題の進捗を正確に自覚したり、教師が確かな見取りを行ったりすることにはつながっていなかった。

単元のゴールを見通した上で、学習問題に対する到達の規準や、判断の根拠となる観点を学級で共有し、同じ指標をもって振り返ることができるようにしていく。そうすることで、学級全体で進捗を確かめ合いながら学びを進めるとともに、自分自身の考えの変化や学びの価値をより確実に自覚できるようにしていく。

視点2 他者の学びを自らの学びにつなぐ

共通点・差異点の把握から思考を深める関わり

自分の考えとの共通点や差異点に気づき、必要な考えを自分で選びながら思考を広げたり深めたりできるよう、板書に位置付けるなどしてそれぞれの立場や視点を明確にした。それにより、他者の考えと自分の考えを比較する中で、共通点や差異点に気づき、様々な立場や視点があることを捉えようとする姿が見られた。一方で、共通点や差異点に気付くことに留まり、それらを基に自分の考えを広げたり、社会的事象への捉えを深めたりするところまで、十分に至らなかった。教師が子ども一人一人の考えの内容や捉え方を丁寧に見取り、考えの構造が異なる子ども同士が意図的に関わることができるような学習過程を構成していく。他者の考えと出合うことで自分の考えが揺さぶられたり、問い直されたりする経験を重ね、考えの広がりや深まりを生み出していく。そうした関わりを通して、他者の考えを基に自分の社会認識を更新し、新たな価値を見いだしていく姿をねらう。

他者の考えを求める必要感を生む工夫

自他の考えや根拠を価値あるものとして捉え、社会認識の深まりにつなげられるよう、付箋や丸シール、色ペンなどを用いることで、他者の考えを自分の考えと関連付けながらまとめられるよう促した。そうすることで、他者の考えと自分の考えとの関係に着目しながら整理し、他者と関わりながら学びを進める姿を生むことにつながった。一方で、用いた手立てが、「他者とつながるための手立て」として十分に機能していたとは言い切れず、他者の考えを求める必要感のない子どもの姿も見られた。他者の考えを取り入れる必要感を生み、他者との関わりを通して自分の考えがどのように変容したのかを実感できるような手立てを講じていく。そうすることで、より他者との学びを生かしながら、自分の考えを広げ、深めていく姿を目指す。

【本単元で目指す意志をもっている姿とその理由】

戦争の様子から問題意識をもち、戦争の影響を基に自分ならではの平和の価値を見いだそうと深く考える姿

本単元は、戦争の経緯、被害、当時の人々の暮らしを学び、戦時体制の状況下でも精一杯生きてきた人々の姿に思いを馳せながら学習していく単元である。しかし、子どもの身近に戦争をしていた人々の姿がなく、当時の人々の暮らしやその思いなどが不明瞭であるため、追究に意欲をもてない子どもの姿がある。そこで、単元の初めに当時の標語を提示し、その意味を予想し、単元を通して確かめたいといった目的意識をもてるようにした。また、当時の人々の様子や暮らしぶりを現在や既習と比較し、戦争の影響について問題意識をもてるように単元を構成した。そうすることで、戦線の拡大に伴う人々の外面や内面の大きな変化について時代背景や政府、国民、外国などの立場や視点から捉え、人々に寄り添い、自分ならではの平和の価値を見いだそうとする姿が生まれると考えた。そのような意志をもっている姿を生むことが平和でよりよい社会を創る態度につながると考える。

【単元の目標】

- ・日中戦争や日本に関わる第二次世界大戦の経緯や被害、戦争中の人々の暮らしを調べ、まとめる活動を通して日本がかつて戦争をし、国内外に大きな影響を与えたことを理解している。【知識及び技能】
- ・当時の様子から戦争中の人々の暮らしについて戦争による影響の大きさや、全国民を戦争に協力させようとした政府の意図などを多面的・多角的に考え、自分の言葉で表現している。【思考力、判断力、表現力等】
- ・日中戦争や日本に関わる第二次世界大戦の経緯や被害、戦争中の人々の暮らしについて、予想や学習計画を立て、学習問題を自分の言葉で追究し、解決しようとする。【学びに向かう力、人間性等】

視点1 自らの学びをつなぐ

標語の意味を核にした単元の構成

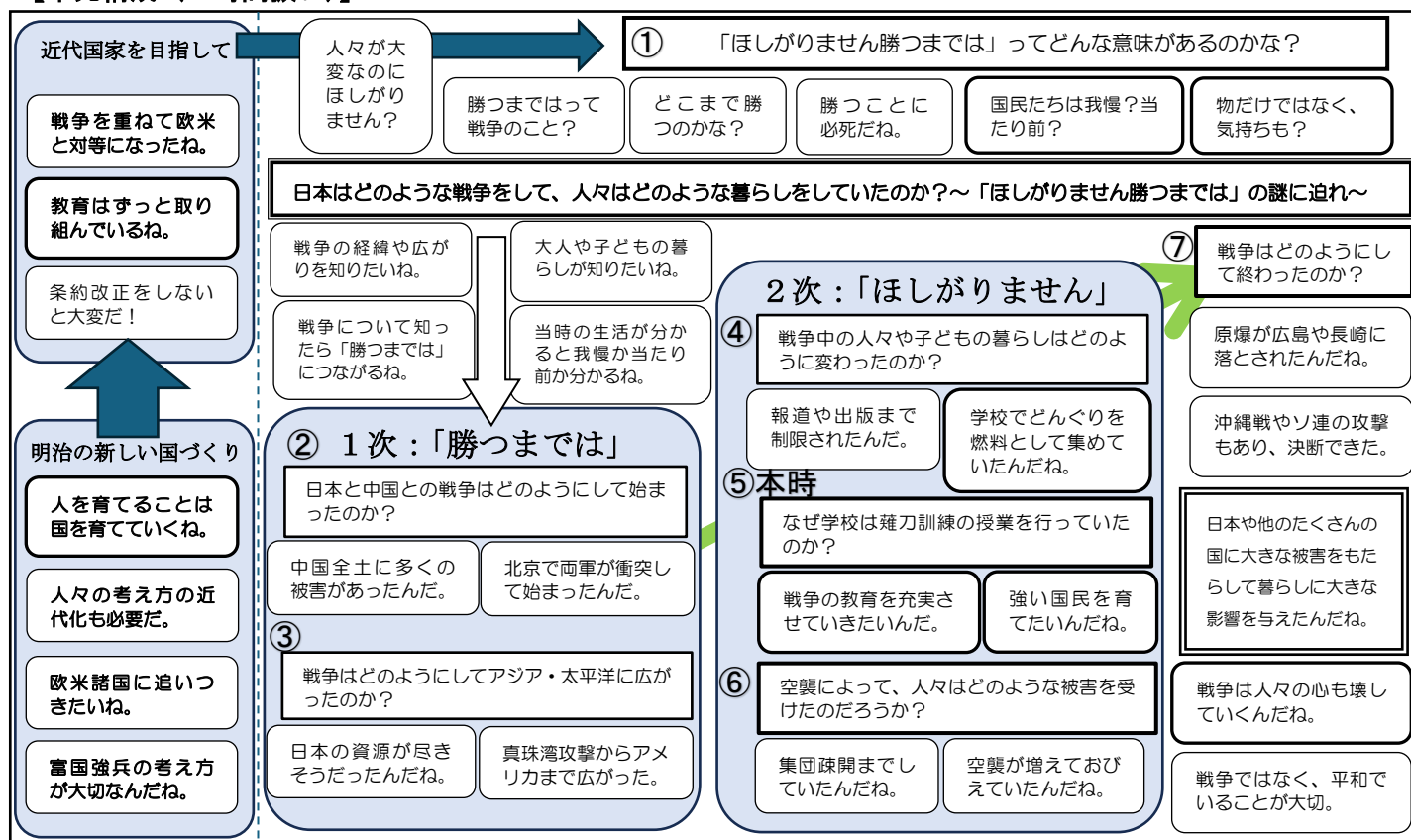
日本の空襲被害と人々の生活の様子を提示し、戦争の終結まで15年かかったことを伝える。そこで、当時の小学5年生が作成したと言われ、入選した標語「ほしがりません勝つまでは」を提示し、今と比較して考えた意味や予想、疑問などを束ねていき、単元の学習問題を子どもと設定する。それらの予想を確かめるため、標語に沿った単元の構成にする。そうすることで、学習内容の見通しをもち、追究意欲を高めて持続しながら学んでいく子どもの姿を生む。

視点2 他者の学びを自らの学びにつなぐ

学びのつながりの可視化

自ら追究したものを交流する場面では、丸シールや付箋を用いて他者の学びとの共通点や相違点を可視化し、自分に取り入れられるよう促す。その気づきを踏まえて振り返りを記述し、自分の考えを再構築する時間を設定する。それにより、子どもは他者の考えやその根拠、視点に目を向け、自分にはなかった気づきを学びに取り入れようとする姿へと向かう。こうした交流と再構築を積み重ねることで、様々な視点から戦争の影響をより深く捉える姿が育まれる。

【単元構成（7時間扱い）】



【本時の目標】

戦時体制の中でも学校が子どもに対して薙刀訓練を行わせる意図を考える活動を通して、当時の様子を関連付けて考え、国民を心身ともに協力させるためだったと自分の言葉で適切に表現できるようにする。

【思考力、判断力、表現力等】

【本時の展開】（５／７）

子どもの意識と活動	つながっている学び	教師の意図とかかわり
＜前時まで＞ 戦争の様子が分かる資料から日本で起きた戦争について考え、「日本はどのような戦争をして、人々はどのような暮らしをしていたのか？」という学習問題をたて、追究している。多くの地域に多大な被害を与えたことを理解している。また、戦時体制において国民が全面的に戦争に協力していることを理解している。 戦争によって多くの国に被害を与えたんだね。 その時の国民の生活が大きく変わったんだね。 札幌にも戦争の影響があったんだね。		
○薙刀訓練の様子を読み取り、問いをうむ。  小学生は戦争に参加しないよ。  大人ならまだ分かるけど。 同じ年の人たちだと思えない。 みんなすごく真面目だよ。 人を本気で斬る授業だね。 なぜ学校は薙刀訓練の授業を行っていたのか？	戦時体制の暮らし 当時の学校での様子	子どもに薙刀訓練を学校の授業で行っていた資料と行った時間、学年、指導内容などの具体的な事実を提示することで、子どもが戦争に協力させられていた意味について問題意識を高められるようにする。（視点１）
○既習や資料を基に追究する。 戦う体力や技術 ・体を鍛えて戦争に協力させたいんだね。 ・自分で身を守り、強い兵にしたいんだ。 ・戦争で敵の攻撃に備えるためだよ。 ・周りの人や家族を守りたいんだね。 戦争に協力する心 ・小さいころから国の方針を理解させるためだよ。 ・戦争に協力することが当たり前だと思ってもらうためだよ。 ・戦争の正しさを教え込むためだよ。 全ては戦争のため 戦争のための人を育て、強い国にする	時代背景 教育の歴史	交流で得た考えを付箋や丸シールで自分の考えに貼るように促し、自分と他者との共通点や相違点を明確にできるようにする。そうすることで、他者の学びから戦争の影響を捉えることができる。（視点２）
全ては戦争に勝つために、心も体も国に協力していく体制を作るためだった。 ○当時の作文に対する自分と当時の先生のコメントを比較する。 本当は嫌だったのかもね。 先生の心も壊しているね。 戦争はみんなの心を壊すね。 ○「ほしがりません」の内容を考える。 学校で楽しく学ぶことも欲しがらないのかな。 学校で友達と話したり遊んだりすることもかな。 そういう楽しみも全てをかけて戦争に向かったんだ。	戦後へのつながり 単元の学習問題	終戦後の子どもの作文にコメントを書くよう促し、当時の先生のコメントと比較する場を設定する。これによって当時と現在の認識の違いに気付くようにして全ての人は戦争に協力させられていたことを検証し、学びの深まりを実感できるようにする。 「ほしがりません」の内容を考え、その理由をノートに記述するよう促す。単元の学習問題に対しての進捗を確かめ、戦争による影響を自覚できるようにする。（視点１）

【本時の評価】

学校が子どもに薙刀訓練を行わせていたのは、全ての国民を心身ともに戦争に協力させるためだったと既習や資料、他者の気付きを基に関連付けて考え、自分の言葉で表現している。

（行動観察・発言・ノート）

授業後の振り返り

【本時の板書】



視点1 自らの学びをつなぐ

【成果】

- 標語で単元を貫くことによって、子どもたちに学習の見通しをもたせることができた。
- 「ほしがりません勝つまでは」の標語の内容を考える中で、本時のキーワードになる「心」を反映させている子や、いつもの授業の贅沢さ、大切さを考えている姿が見えた。
- 標語に沿って進めたことで、単元を通して自らの学びをつなげることに繋がったのだと思ったが、毎時間の学習したことを教室に掲示していたり、子どもたちの発言をうまくつなげたりすることができた。
- 教材化を丁寧に行うことで、子どもが遠い歴史や社会を身近に感じたり、考えてみたいと思ったりすることができた。
- 単元の1時間目において、目的意識や問題意識をもたせることで、「知りたい」「明らかにしたい」などといった思いをもたせることができた。

【課題】

- 標語を通した追究の意識を、子どもたちが一層もてるようにするためには、導入での提示や単元学習シートのようなもので自分の学びの立ち位置を確かめるなどの手立てが考えられた。
- 標語の内容について前の時間に自分が書いたこととの変化をすぐに確認できるとよいのかなとも思った。
- 問いの文言は学校目線、作文添削は先生目線。標語は子ども目線。現代の自分たちから見てといったように考える立場が多くなりすぎていた。

視点2 他者の学びを自らの学びにつなぐ

【成果】

- 他者の考えをよく受け取って考えを深めていた姿が見られた。また、自分とは異なる新たな考えに気付いて発言していた。
- 付箋を使って他者の考えをため込み、考えを深めようとしていた姿があった。
- 丸シールや付箋は子どもにとっても友達と交流していることが分かりやすい手立てだった。

【課題】

- 板書が他者の考えをみとったり、自分との違いを感じたりするのに大きな役割を担っているからこそ、付箋や丸シールが「つながるための手立て」ではなく、「つながりを見とるための手立て」という感じがした。
- その子が何のために他者とつながろうとしているのかを見定めることの難しさと、どちらの子にとっても他者とつながったことによる“お土産”を持ち帰れるようにするための手立ての追究をしていく必要がある。
- 他者の学びを自らの学びに取り入れるために、適切な問題意識だけではなく、他者が何をどの程度行っているのかを見える状況にあること、立場や視点が異なるように授業づくりの段階で検討できるようにしていく必要がある。

【本単元で目指す意志をもっている姿とその理由】

国際的地位を向上させるための様々な取組について、自分ならではの価値を見いだしながら、深く考える姿

本単元は、歴史の学習の中で初めて外国との関係を中心に据えて着目し、当時の日本を国際的な視点から捉えていくことが求められる学習である。だからこそ、出来事を自国の立場だけで理解するのではなく、他国の視点や地理的条件を踏まえて捉える必要がある。そこで、国民や政府、外国など様々な立場や視点で読み取れる資料を充実させ、多様な視点から事象の背景にある意図や価値を考えられるよう単元を構成した。そうすることで、子どもが各学習で得た視点を往還させながら、一つの社会的事象に対し複数の意図や価値について関連付け、自分ならではの考えを根拠とともに形成していくようにする。こうした学びを積み重ねていくことで、今後の社会科学の学習においても、出来事の背景を多角的・多面的に整理し、より深く考察を進めていく姿となり、多くの事象を結び付けながら判断する力の育成につながる。

【単元の目標】

- ・条約改正、大日本帝国憲法の発布、日清・日露の戦争、科学の発展などについて調べてまとめ、日本の国力が充実し国際的地位が向上したことを理解している。【知識及び技能】
- ・世の中の様子などに着目して、問いを見いだし、条約改正、大日本帝国憲法の発布、日清・日露の戦争、科学の発展などについて考え、表現するとともに、それらを関連付けたり総合したりして、当時の世の中の様子を考え、自分の言葉で適切に表現している。【思考力、判断力、表現力等】
- ・海外と対等な国を目指した取組について、予想や学習計画を立てたり、学習を振り返ったりして、学びの進捗を確認し主体的に学習問題を追究し、解決しようとしている。【学びに向かう力、人間性等】

視点1 自らの学びをつなぐ

様々な立場や視点から捉える資料の充実

教科書の資料に加えて、欧米諸国の勢力図や周辺国との位置関係など、複数の立場から読み取れる資料を精選して提示し、多様な視点から捉えられるようにする。これにより、子どもは、一つの事象でも立場や視点によって見え方が異なることに気付き、複数の価値や意味を結び付けて考えようとする姿へ向かえるようにする。こうした資料の読み解きを重ねることで、一つの社会的事象から複数の価値を見いだし、自分の判断を多角的・多面的に深めていこうとする力が育まれる。

視点2 他者の学びを自らの学びにつなぐ

他者の学びの可視化

自ら追究したものを交流していく際に、他者の考えを青ペンで書くように促し、他者から得た学びを明確化できるようにする。それらを踏まえ、まとめや単元シートで自分の考えを再構築する時間を設定し、問いや学習問題の達成度を問う。そうすることで、他者の考えのおかげで、自らの学びが進んだことを実感し、その価値に気付けるようにする。その姿を価値づけていくことで、次の追究でも他者と関わりながら複数の価値を見いだし、意欲へとつなげていくことを目指す。

【単元構成（9時間扱い）】

①ノルマントン号事件とは、どんな事件だったのだろうか？

これは国民が怒るよね。

今の日本と比べたら、当時の日本の立場は相当低いね。

イギリスの勢力がすごいな。

明治の日本は、どのようにして欧米との差をうめたのだろうか？～目指せ不平等条約の改正～

②対等な国を目指すためにどんな取組をしたのかな？

政治や文化の改革をしたけど、まだ遅れていると言われていたね。

やっぱりある程度、武力も向上させて対等にならないと。

産業とか科学の技術自体も、この時代はまだ欧米に追いついていないね。

政治

武力

産業・科学

③自由民権運動が広がる

国民が政治に関わりたいて願っているね。

他国からの評価を上げないと、条約改正には繋がらないね。

⑤日清戦争

アジアの中では、地位が上になっているね。

賠償金は軍事的な面と政治的な面に使われたね。

⑦産業の発展

工業や発展して、戦争の強さにも繋がったね。

現代に近付いてきているのがわかる。

④国会が開かれる

天皇中心の国づくりに戻ったね。

徴兵令で国民にも戦争に協力してもらわなきゃいけなかったんだね。

⑥日露戦争（本時）

領土が広がったのは、産業や武力的にもプラスだね。

戦争を通して、日本の強さを、世界に認めさせたね。

⑧産業の発展による影響

だいぶ他の国との差は縮まったのかな。

同盟を結んでもらえるくらい認められたよ。

⑨日本の国力や立場が向上したことで、欧米から認められ、条約の改正につながったんだね

他の国のおかげで国の力が充実してきたね。

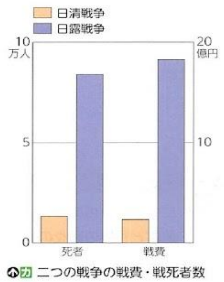
他の国とかかわりながら、世界の中での日本の立場を向上させていったね。

【本時の目標】

小村寿太郎がポーツマス条約を結んだ意図を考える活動を通して、他国との関係や自国の様子を関連付けて考え、自国の国際的地位の向上を優先したことについて自分の言葉で表現することができるようにする。

【思考力、判断力、表現力等】

【本時の展開】（6/9）

子どもの意識と活動	つながっている学び	教師の意図とかかわり
＜前時まで＞ 外国との不平等な条約によって起こった事件から、他国との不平等な関係に気付き、「明治の日本は、どのようにして欧米と対等な国を目指したのだろうか？」という学習問題をたて追究している。政治の在り方について学ぶことで当時の人々の様子を知り、日清戦争から被害、賠償金の金額とその使い道について学習した。		
○ 日露戦争の被害とポーツマス条約についての資料から問いを生む。  二つの戦争の戦費・戦死者数  負けましたが、賠償金は一切、払いません  「賠償金無し」とポーツマス条約の中に書いておきましょう。 賠償金なし!? 戦争をした意味がない。	日清戦争との比較	
なぜ、小村寿太郎は賠償金も得られないのに、ポーツマス条約を結んだのだろう。 ○ 問いに対して追究 外国 ・ 勝ったという事実 → 周りの国からの評価 up ・ 領土拡大を増やす → 大陸進出へ → 人が増え、産業の向上にもつながる 国内 ・ 国民も自信になる → 戦争をしようとする国へ ・ 国内が疲弊している → 兵力（国民）がこれ以上、いなくならないため → 国民からの不満が出る 国としての地位を上げること 国の力を向上させて国の地位を上げることが大切にして、この決断をしたんだね。	国民からみた視点 欧米や周辺国との相互関係 勢力を伸ばした場所の位置関係	複数の児童の異なる見方を取り上げ、その価値を全体で考える。同じ事象でも価値が多様であることに気付かせ、一つで満足せず視点を広げて考えられるようにする。（視点1） 交流で得た考えを青ペンで記述するよう促し、考えを再構築する時間を設定する。そうすることで他者の学びのおかげで、自らの学びが進んだことを実感し、追究のために他者の考えを求めていく必要を感じられるようにする。（視点2）
○ 単元の学習問題の振り返り 武力も向上し、他国と対等に戦える力がついてきた。周りの国にもある程度認められている。 日清戦争の時と違い、大きな被害を出したが、それでも地位を向上するという目的は達成している。 ○ 学習問題の達成度を判断する 今日の学習で、日本が戦争で他国に追いついてきたから、「武力」の部分に関しては大丈夫そう。 あとは、産業が発展したことさえわかれば、学習問題は達成できそう。	単元の学習問題 単元シートを使った見通し	学習問題に対する考えを単元シートに記述するよう促し、その達成度を問う。学習問題に対してどんなことが分かったか、もっと知りたいことは何かを確かめ、学びの進捗を自覚できるようにする。（視点1）

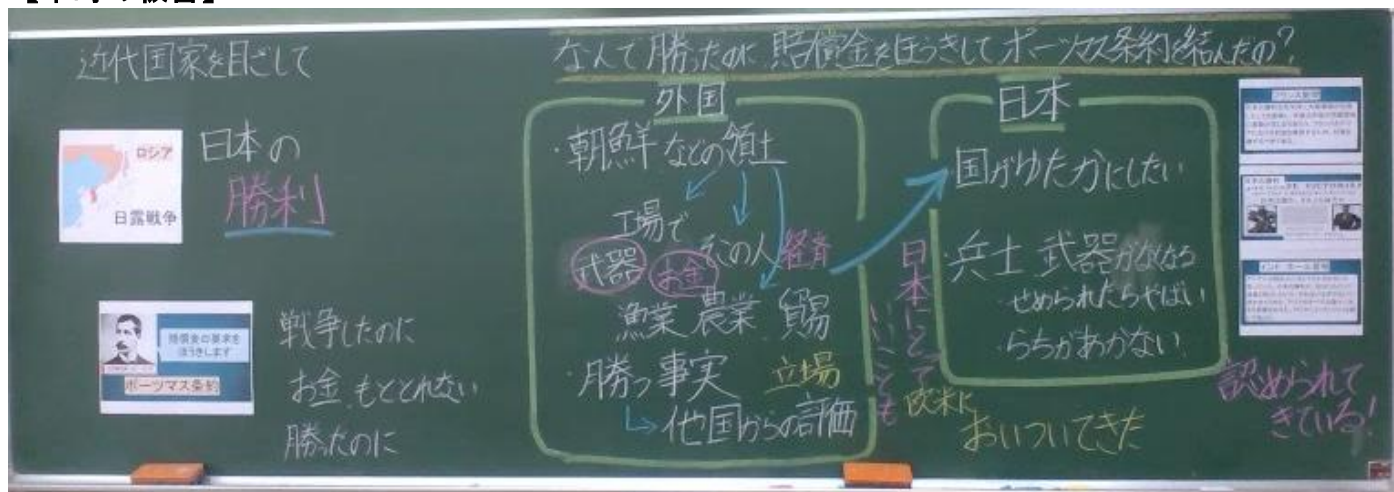
【本時の評価】

既習や資料、他者の気付きを基に、他国との関係や自国の様子を関連付けて考え、小村寿太郎がポーツマス条約を結んだのは、自国の国際的地位の向上を優先したための決断だったことについて自分の言葉で表現している。

（行動観察・単元シート・ノート）

授業後の振り返り

【本時の板書】



視点 1 自らの学びをつなぐ

【成果】

- 単元のゴールを明確にしたことで、子どもたちに学習の見通しをもたせることができた。
- 単元の学習シートへの記述を毎時間積み重ねたことで、単元の学習問題へのつながりを意識して、学ぶ姿が見られた。
- 単元の初めに、目的意識や問題意識をもたせることで、「知りたい」「明らかにしたい」などといった思いをもたせることができた。
- 授業の後半に他国から見た日本の評価の資料を提示したことで、今までの学びとつなげ、認識を深めている姿が見られた。

【課題】

- 学習問題について、学級で考え設定することができたが、何をどのように学ぶのかという計画までを教師と子どもの間で共有することはできていなかった。
- 学習問題への達成度の基準が不明瞭であった。「日本が外国に追いついたかどうか」について明確な基準がなかったため、子どもがそれぞれの感覚で達成度を決めていた。学級で基準を決めれば正確な見取りや他者との比較の必要性も生まれる。
- 視点・立場・事実・考えなどそれぞれの教師の捉えが不十分であり、子どもも基本的には日本からの立場にとどまっている割合が多かった。

視点 2 他者の学びを自らの学びにつなぐ

【成果】

- 他者の考えと自分の考えを比較する中で、共通点や差異点に気付く姿が見られた。
- 青ペンは子どもにとって友達と交流していることが分かりやすい手立てで、他者の交流したことは子ども自身も自覚できていた。
- 他者の意見を青ペンで書き、その後の学習シートでも他者の考えをふまえながらまとめている姿が見られた。

【課題】

- 青ペンが「つながるための手立て」ではなく、「つながりを見とるための手立て」という手立てだった。また、つながりを自覚し、今後に向けた他者の学びの必要感をもつことについても課題が残った。
- 交流で得た考えを青ペンで記述し、自分の考えとの差異点や共通点を捉えることができていたが、そこから自分の考えを深めることについては達成していない児童はほとんどであった。
- 他者のとのつながりの中で、自分の考えを相手の考えをつなげて新しい考えになったり、自分の考えの中での優先度が変わったりするところまではいけない子どもが多かった。今後は、教師が子どもの考えを見取ることと、どの子とどの子をどのようにつなげていくかが今後の課題になっていく。